

---

# その者を追い返せ

歌月 碧威

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その者を追い返せ

### 【Nコード】

N35490

### 【作者名】

歌月 碧威

### 【あらすじ】

\*『その者を引きずり出せ』の続編です。

あれから一年後。

私と魔王は相変わらずの日常を魔界で過ごしていた。

でもそれも魔王が風邪をひいた事をきっかけに、がらりと変わっていく。

騒動に巻き込まれた先で私が出会ったのは、イケメン王子様達。

しかも熱烈歓迎とくれば、今度こそ溺愛・逆ハーコース！？

なんてそんなおいしい話あるはずなく、私は厄介事をたのまれてしま  
う。  
それは……—

## 1 それはほんの些細な出来事だった

「——今、なんて言った？」

ついさつき耳に入って来た言葉は、久しぶりのゆったりとしたティ  
ータイムをぶち壊すのぐらいのものだった。

そのおかげで、□元まで運んでいたフオークが止まっている。

大好きな苺の甘酸っぱい香りが食欲を誘うが、今はそれどころじゃ  
ない。

今問題なのは、さつきテーブル越しに座っている婚約者がしゃべっ  
た内容だ。

「美咲は余の話を聞いておらんかったのか？」

そう言つて優雅に紅茶を啜っているのは、この魔界きつての魔力の  
持ち主でこの魔界の王。

つまりは魔王様。

彼は私の婚約者。ちょうど一年前、私はこの魔界に召喚されてきた。  
理由はただこの魔王を部屋から引きずり出すため。

その時いろいろあつて、女神補欠になり魔王の婚約者となつたのだ。

「ちゃんと人の話は聞かねばならぬぞ？」

紫色の瞳が優しく私を見つめている。

魔族特有の整った顔立ちに人間界の大抵の子は、落ちるだろう。  
だがこいつら魔族は顔だけだ。

だってこいつら魔族はデリカシーがないのだから。

友達がイケメンになら何されても良いって言つてたけど、あれ嘘だ  
ね。

この魔界暮らしで何度血管が切れそうになったことか。

ぶん殴ってやりたくなつた事も、一度や二度じゃない。ただ一年も経つとちよつと感覚が麻痺してくるから、最初ほどでは無くなつたかも。

「聞いてたよ。もうすぐ魔王の誕生日パーティーなんでしょ。違うくて、その前。プレゼントのリクエスト内容のこと」

「ああその前か。余は美咲の裸エプロンが見たいと言つたのだ」さわやかにエロ発言すんな。

周りみるよ。人いるだろうが。人が。

テーブルの傍にはワゴンが置かれてあり、メイドが紅茶のおかわりをいれてくれている。

もちろん、このメイドさんも美人さん。

「お前は変態か」

裸エプロンだつて？魔王はおっさんかよ！！  
言うまでもないが、しない。する筈がない。

大体シリウスとかのだったら見応えあるけどさ。  
私？あゝ、無理無理。んな大層な体じゃないですつて。

「絶対嫌」

「なぜだ！？美咲！！」

んなもん聞くまでもないだろ。却下だ。却下。

つたく魔界にそんな単語あるのか？もしかして人間界で知つたとか？  
どちらにせよ、この話は強制的に終わりにして闇に葬り去るからいいや。

……と思つたんだけど、あの男がそうはさせてくれなかった。

「おい」

「何よ？」

めんどいな。私はため息を吐くと後ろを振り返る。

そこには空と同じ色の髪をした男が立っていた。

耳がちょうど隠れるぐらいの髪の長さに、甲冑と腰にある大剣。

まあ、明らかに職業騎士。

彼の名はラムセ。一応ここで私の護衛を務めている。

魔王は臣下からの信頼も厚い。

一部の間では心酔されているんだけど、まあラムセも残念ながらその一人。

だから――

「御心が広い魔王様がお前のような貧相な体でも良いって言って下さっているんだぞ！！ありがたく申し出を受ける」

……だから完全に魔王の肩を持つ。

しかも魔族らしく、失礼な発言を平気で言う。

やっかいな事に、こいつら自分が失礼な発言をしたとは思ってない。もうカルチャーショックどころじゃねえし。

「貧相っていうな！！貧相って！！」

椅子が倒れるかもしれないというぐらい、後ろ向きになって椅子から身を乗り出して指を指す。

人に指を指してはいけません。

そう小さい頃教えられたが、今はその教え忘れる事にする。

「ラムセ私の裸見たことないでしょ！！これでも凹凸はあるんだっつうの。……一応だけど」

最後が小声なのは気にするな。

でも嘘はついてないよ。だって実際私にだってあるもん。

まあ、シリウスとは比較にならないけど。

「見たことあるわけないだろうが。見たくもない」

「ほら！！ねえ、魔王言つてやつてよ！！ちゃんと凹凸あるって！！」

なんか自分で言つて悲しくなってきた。

「ラムセ。余は美咲の胸が小さくても好いておる。それにもし美咲の容姿が整っていれば、美咲という感じがせぬではないか。街に溶け込んでこそ美咲なのだぞ」

「さすが魔王様です」

ラムセは魔王の微笑みに対し、目を輝かせた。

おい。おかしだろ。なぜそうなる？

「人の事さんざんコケにしゃがつて、お前ら何様のつもりだ？」

この調子だと、たまに口が悪くなるのもしょうがない。

まあ、わかつてたけど。魔王がフオローなんてしない事ぐらいさ。でも少しはなんか別の言い方あるでしょうが。

「——お茶の席中失礼いたします。魔王様」

突然艶のある声が聞こえてきたため、私達は話を止めその場所に全員視線を移す。

するとそこには今話題になっている裸エプロンが似合いそうな、プロポーシオンを持った妖艶な美女が立っていた。

その美女は私をここに召喚した魔女・シリウス。

毎度の事ながら、歩くたびに揺れ動く胸に目が言ってしまう。

あゝっ！！なんでおっさんっばいの私！？もしかして変態は私かっ！？

「これを」

シリウスはテーブルの上に何か紙で包まれた物を置く。

すると魔王はそれを見て顔を顰めると、手で弾いてしまった。

「飲まぬ」

「魔王様!!」

なんだろう？

私はその包みを見て首を傾げる。

「ねえ、シリウス。それ何？」

「薬草煎じた物よ。魔王様喉が痛いそうなの。おそらく風邪だと思うわ」

「えっ！？大丈夫なの？」

というか、魔族でも風邪って引くんだ……

あ。そう言えば怪我とかなら治癒魔法で治せるけど、病気とかなら治せないって聞いたことあるっけ。

「平気だ。薬は飲まぬ。苦いから好きではない」  
子供かつ!! 大体、あんた2546歳でしょ？  
良い年した大人なのに。

「ちょっと、子供じゃないんだからさ」

「嫌な物は嫌じゃ」

「——あ」

そう叫んだ時には魔王の姿はなかった。

あいつ転移魔法で逃げやがったな。

「シリウス」

「無理ね。魔力を隠してるわ」

まったく。あの魔王め。

もすうぐ自分の誕生日パーティーなのに。  
酷くなっても知らないんだからね。

——この時の私達は誰も知らなかった。  
こんな些細な出来事が、のちにあんな騒動に発展するなんて事を。

## 2 不穏な足音はすぐ傍までに

荒れてるな……

震えるルルを腕に抱きしめながら、私は窓側に二・三步と足を歩み寄っていく。

どんよりと濁った空に、窓ガラスを打ちつける雨風。そして時折地響きのように鳴る雷。

外はまるで台風接近とでも言うような大荒れの天気。

「ルル、大丈夫だよ。ちゃんと傍にいるから。ねっ？」

腕の中の小さい彼をなんとか安心させようと頭を撫でてみるが、震えは止まらない。

せめて雷止んでくれると、ルルも大丈夫なんだけど。

私はそつと溜息を吐くとまた窓から外の様子を伺う。

ほんのわずか目を離していただけなのに風の強さが、さっきより強くなっているように感じた。

腕の中の小さな存在も心配だけど、私にはもっと心配な人がいる。

大丈夫なのかな？魔王――

私は視線を左壁にある扉に移動させそこに固定させた。

そこは隣にある魔王の部屋と私の部屋を繋ぐ扉。

彼はその室内で今、医師のよる診察を受けている最中だ。

さっきバイトから戻ると、魔王が倒れたと聞かされた。

それを聞いて急いで魔王の元へ行こうとしたけど、診察中だからと止められ、こうして自分の部屋で待機をしている。

熱と咳が酷いって言ってたけど、やっぱり風邪かな？

だからあれほど薬飲めって言ったのに、ずっと逃げてるんだもん……

魔王は元々風邪気味だった。

だから何度か薬を飲ませようとしたんだけど、そのたびに転移魔法で逃げられてしまっていた。

魔王は魔界で魔力が一番強いいため、魔力を隠して逃走した魔王を見つけ出せる人は皆無。

そのため、薬は一度も飲んでいない。

私に魔力があつて、魔王より強かったらな。

そんな風に考えながら扉を見つめていると、タイミング良く控え目なノックが耳に届いた。

それを聞き私はいてもたつても居られなくなり、「はい」と返事をしながら扉の方へと向かう。

「美咲、もう入っても良いわよ」

扉から顔を覗かせたのは、シリウスだった。

「魔王はどうなの？」

「ギルバードの話では、やはり風邪が悪化したらしいわ」  
ギルバードってお医者さんの名前だよな。たしか。

「だから薬飲めって言ったのに……」

「そうね、今回は魔王様の自業自得の結果よ。怒ってあげて」  
シリウスが体を少し退かして、私を室内へと入るように促す。

私はシリウスに風邪が移ると悪いのでとルルを預けると、足を踏み入れまっすぐ中央に配置されているベットへと向かった。

「……美咲。移るから、余の傍に来るでない」

ベットには魔王が横になっていた。

おでこには冷やしたタオルをのている。

「平気。私、体だけは丈夫なの」

魔王の頬に触れると、いつもじゃ考えられないぐらいの体温だった。

——熱いな。これ結構熱高いよ。

魔王は熱のため色白の顔は赤く色づいていて、こちらを見あげている瞳は潤んでいる。

呼吸もしずらいのか、荒い。

「すまぬ。美咲に言われた通り、始めから薬を飲んでいれば……」

「ほんとだね。人が飲めつてあれほど言ってたのに、薬が嫌いだって逃げていた魔王の自業自得。周りにしてみれば、ほんと迷惑な話だよ。また執務溜まっちゃうしさ。ほんとうがうがないよね、うちの魔王サマは」

「……すまぬ」

いつもの口調で話したんだけど、どうやら弱っている魔王にはきつかったらしい。

大きな瞳に雫をためたかと思うと、堰を切ったかのように泣き始めてしまった。

もう、泣かないですよ。

魔王は両目を隠すようにして泣いている。

私はそんな魔王の髪をすくようにして撫でた。

「だったら早く良くなって、迷惑かけた分皆に返そうね。もう、薬は飲んだ？」

魔王はほんのわずかだけど、首を縦に動かした。

良かった。薬飲んでくれたみたいで。

私はほっと一安心と胸をなで下ろす。

「こんな軟弱で周りに迷惑をかける余の事嫌いになったか？」

「今さら、こんな事ぐらいでなるわけないでしょうが。もうおしゃべり辞めて少し眠りなよ。——ディアス」

ディアスって言うのは、魔王の名前。

みんな魔王って呼ぶけど、魔王にもちゃんと名前がある。

私にディアスって呼んでほしいらしけど、なんか魔王っていうのがしつくりと呼び慣れているため、なかなか呼べないでいた。

彼はその名を呼ばれた事に対し目を大きく見開いていたが、その後はにかなだ笑みを浮かべた。

「美咲」

「ん？」

横になっている魔王は、右手を私に向かって伸ばしかけている。

私はその手を両手で包むように握りしめた。

「ずっと余の傍に居てくれ」

「うん、いるよ」

「余は美咲がおらぬと狂ってしまっ」

もしかして寂しいのかな？

ほら、熱出すと心細くなっちゃうじゃんか。

だから急にそんな変な事を聞いてくるのかもしれない。



### 3 女神補欠の定位置

「魔王様、なんと御勞しい姿……出来るなら、あの女神補欠がかければいいのに」

おいつ、そこは自分が代ればいいのにでしょうが。耳に届いてきたその声に、思わず突っ込んでしまう。

まったく。こいつは本当に……

私はタオルを洗面器に浸しながら、半分呆れ返ってその声の主を見つめる。

そいつはベットの傍に立ち膝になり、眠っている魔王を屈んで見つめ居ているような格好をしていた。

いつも私の前では偉そうな顔をしているのに、今は心配しているからか、眉を下げ悲壮感漂わせた表情。

しかも目元はうっすらと涙を浮かべている。

たぶんこいつは私に何かあってもこんな風にはならないだろう。

ラムセがこうするのは、崇拜する魔王様だから。

きっと私が風邪ダウンしても、「お前弱すぎ。魔王様に迷惑かけてんじゃねえよ」と熱で苦しむ私の枕元でグダグタと小言を言うはずだ。

「……ラムセ、美咲が風邪をひいたら可哀想じゃ。この苦しみは余だけでよい」

「なんと慈悲深いお方なんですか、貴方様は」

熱のため息も絶え絶え魔王が告げた言葉に、ラムセ目頭を押さえ始めた。

おい、まさか感極まって泣いてんじゃないでしょうね？

たまになぜここまで魔王に対して崇拜出来るのか理解出来なくなる時がある。

そりゃあ、私だって魔王がすごい人だってわかるよ？

魔力桁違いらしいし。

でもこれっていきすぎじゃない？

なんかラムセの反応に「なんだ、この猿芝居は」とでも言いたくなってくるもん。

「ご安心下さい、魔王様。女神補欠は風邪なんて引きません。ウィルスすらも逃げいきます」

「私は一体何者だっ！！」

風邪はめったに引かないけど、それは引きにくいってだけだったの。私だって引く時は引くさ。

「お前それより、シリウス達待つてんじゃねえのか？」

「あ、うん」

急に話さがらりとかわってしまい、戸惑いながらもうなづく。

私はこれから自分の世界にスポーツ飲料と栄養ドリンク、それから冷却シートなんかを買いに行く所だったのだ。

タオル変えてから行こうって思ってた所に、ちょうどラムセが来たからそのまま居座ってしまった。

普段あつちの世界とこつちの魔界を魔王に貰った鍵で行ったり来たりする私だけど、今回は魔王の魔力が不安定なため、数人のサポートを受けなければ行き来出来ないんだって。

なんでも魔王の魔力が不安定なため、それを安定させてもらわなきゃならないみたい。

だから私があつちの世界に買いものに行くために、城で力のある者数人をシリウスが集めてくれている。

「じゃあ、私ちょっと行つて来るから、ラムセ魔王の事頼むね」  
財布片手に行こうとしたら、ラムセに腕を掴まれ止められてしまった。

「ちょっと待て。何一人で行こうとしてんだよ。俺は魔王様にお前の護衛を任されてるんだぞ」

「え、いいよ別に。だってシリウスの所に行くだけだもん。それに特に危ない事ってないし」

「いいわけないだろ。今、代わりの者呼ぶから」

魔王を一人にはしておけないので、誰か代わりを呼ばなければならぬ。

呼び鈴を鳴らそうとするラムセを制す。

「良いつてば。それより魔王についててよ。男手が必要な時あるかもしれないし」

この魔界はいたって平和そのもの。

後宮争いとかないし、私が命狙われる事なんてないもん。

「美咲、ラムセを——」

「平気、平気」

私は魔王の言葉を遮り、「行つて来るね」と手を振り、扉を開けて廊下へと出た。

#### 4 後悔はすぐ傍まで

城の廊下は天気がすぐれないためいつもより薄暗く、まだ昼を少し過ぎたばかりだというのに蝋燭が灯されている。

最初ここに住んだ頃からずっと思うけど、なんで城の廊下ってこうも長ったらしいんだろう。

大広間や謁見の間なんかの広い部屋の他に、いろいろな部屋があるから仕方ないっていうのはわかってる。でもこつも広いと疲れるよ。

魔王とかは魔法で使って移動しているから疲れないけど、私は人間のため魔力ゼロ。

そのため体力の消耗が激しい。

最初チャリでも持つてこようって思ったんだけど、廊下に敷かれてある赤い絨毯が上等すぎて歩きたび靴が沈むぐらいなのでそれはちよつと無理なので辞めた。

それに危ないし。

「あゝ。私も魔法使いたい!!」

誰に言うでもなく独り言を言うと、向かい側からでつかい毛玉がすごい勢いでこっちに向かってくるのが見え足を止めた。

「もふもふ!!」

私はそれに向け手を上げ大きく振ると、その軽自動車一台分はあるう大きさのその毛玉は私の声に動きを止めたが、勢い付け過ぎたのか、私を少し過ぎたあたりで急停止してしまう。

ぱつと見その毛玉はクリーム色をしていて、申し訳ない程度に羊のような顔が覗いている。

前足や後足もちゃんとあるが、かろうじて先端が見える程度だ。

「女神補欠様っ!!」

「どうしたの？珍しいね、城の中で会った」

私はその毛玉——もふもふに触りながら訊ねた。

この人。いや、この魔族・もふもふ事、本名・ロダ。

お仕事は、門番や城外の警備などの主に城外でのお仕事。  
だから、こうして城の中で会うのは珍しい。

「それにしても、相変わらずふかふかだね」

この毛刈ったら何人分のセーターが作れるんだろう。

いや、それより布団にしたい。

初めてもふもふに会った時、あまりの衝撃に「毛玉っ！？」って叫んでしまった。

隣りにいた魔王が説明してくれた話では、そういう種族らしい。

だからロダのような人は他にもいっぱいいる。

ただ、なんていう種族か忘れちゃったけど。

私はロダと仲が良いから、そのままもふもふっていう愛称で呼んでいる。

穏やかな性格で時々背中に乗せてくれたりするんだけど、すっげえふかふか。

太陽の下なら最高に爆睡出来る。

「た、大変です。さっき茨の扉の前を通ったら、人影が見えたんですよ——！」

「え？」

大変なのか？というテンポと口調で話すもふもふに、私は彼を撫でている手を休め顔を上げた。

茨の扉ってというのは、魔界とこっちの世界の人間界を繋ぐ扉のこと。扉って呼ばれているけど、見た目は茨のアーチ。

でも、もちろん扉っていうぐらいだからあっちの世界とはもちろん

繋がっている。

通常は空間を歪ませ、あつちの世界とこつちの世界を行ったり来たりするそう。

ただ、今はあの女神のせいとその扉は魔王により封印されている。

——…はずなんだけど。

「今、魔王様の魔力が不安定なので、もしもの可能性もありまして」「ん〜。じゃあ、私ちよつと見て来るよ。もふもふは、一応グレイルやシリウス達に知らせて来て」

「ええっ！？危険ですっ！！」

「平気、平気」

あつちの世界からこつちの世界には来る事は不可能に近い事って前に聞いた事がある。

逆なら問題ないけど。

なんでも魔獣が放たれていて、許可のない人間は食べられちゃうんだってさ。

だからもし、もふもふが見たのがあつちの人達であってもこつちの世界には来れない。

来たら喰われる事知ってるしね。

\* \* \*

「何にもないじゃん」

チャリにまたぎながら私は茨の扉を眺めていた。  
城外の森にあるためか、人がおらず辺りは鳥の鳴き声と魔獣の鳴き  
声が響いている。

茨は城門ぐらいの大きさの丸いアーチを作っていて、その向こう側  
に見えるのはどんよりとした雲に無限に広がる木々。いつも通り異  
常なしの光景だ。

もふもふの見間違えじゃないのかな？

私は首を傾げ、扉の上から下をゆっくりと見るが何も異常な点は見  
当たらない。

念のため、もう少し近づいて見てみるか。

私はチャリを停め扉のすぐ傍まで近づく。

すると何か目の前の景色が歪んだように見えた。

「えっ!？」

慌てて遠ざかろうとしたんだけど、時すでに遅く、私は扉から現れ  
た何者かの手により引きずりこまれてしまった。

## 5 私の時代到来！？

人間とは自分には都合の良い状況に期待するものだ。

たとえば、よく雑誌とかの占いで、今年は恋愛運が絶好調！！モテすぎて困るかも！？なんて事書かれていたの見た事ない？

普通そんな事書かれてたら、期待する。

そんな事書かれていようものなら、立ち読みレベルの雑誌だったとしてもつい買ってしまうかもしれない。

かもしれないというか、いや買ったな。たしか、一昨年。

結果はうん……人生ってそんなもんだよね。

私だけ除外されてたのかもしれないけど。

そう、期待してた分落差は激しいもの。

だから期待しておかないでおこう。この状況も――

「美咲様とおっしゃるんですか？ご本人だけじゃなく、お名前まで可愛らしいんですね」

「シェイドの言う通りだ。本当に美咲様は可愛いな」

私を挟んで左右にいる見目麗しい王子様達は、私が紅茶を飲むのを見てそう言った。彼らだけじゃない。

私を中心にコの字になるように配置された、装飾の施されたテーブルに座っている他の王子様達も同調の声を上げている。

さっきからやる事話す事全てが全部好意的に受け止められていた。

――キタ。コレ、私の時代っ！！

イケメンに囲まれて褒められる。

そんなシチュエーションに気分が良くならないわけがない。

気分良すぎてテンションあがりまくり。アドレナリンでまくり。  
普段褒められる事に慣れてないし、その上相手がイケメンとくれば  
これ普通の反応。

……まあさ、魔王も可愛いって言うてくれる時あるよ？

けど、余計なひと言のせいで全てが無に変わるんだもん。

美咲はウーパールーパーみたいで可愛いとかさ。

そういえばこの間は少しレベル上がって、動物園デート中にカピパラ  
発言だったな。

私も私で、カピパラなら可愛いし、まあいつかって思っちゃったし。  
あの時魔王、「美咲が居ない時に寂しくないように」ってカピパラ  
グッズ大量に買い込んだっけ……

魔界での扱いが扱いなだけに、ここでの扱いはお姫様気分。

私はただ今、異世界召喚の異世界召喚をエンジョイ中。

茨の扉から何者かに引きずり込まれた私が辿り着いたのはここ、魔王  
の世界の人間界だった。

あの女神事件で魔王が扉を封印していたんだけど、体調不調のため  
魔王の魔力が歪み、ズレが生じ道が繋がってしまったらしい。

その歪みにより生じた異変に、ちょうど扉の護衛をしていた騎士が  
発見し彼の手により私は引きずり出された。

もちろん最初は驚いた。

だってさ、甲冑を着たマッスルと目があつたんだもん。

これが驚かずにいられるかっていうの。

誰？何？ここ何処？ってわけがわからず、ぼけつとアホずらを下げ  
ている私に対しマッスルは大慌て。

すぐさま馬に乗せられ、私はここ——ダルサ城に連れて来られた。

はつきり言って勝手にこっちの世界に連れて来られた私は時間が経

つにつれ怒り心頭だった。

だってさ、おかげで私はあっちから向かえが来てくれるまで戻れないんだよ？

魔王具合悪くて心配なのに……

帰るにもこっちからだと言魔獣に食われちゃうし、空間が歪んでいるため、魔界じゃなくどっか違う世界に行ってしまうかもしれないし。

そんな行き場のない私を、このダルサ城の第一王子・リリックは謝罪の意味もかねて城に好きなだけ滞在して欲しいと申し出てくれたのだ。

私が魔界の客だからか、待遇も最高のもの。

しかも王子自ら話し相手してくれてもてなしてくれた。それだけじゃない。

他国にも連絡がいったのか、他の国の王子様達も続々私に会うために会いに来てくれた。

わざわざ献上品持参で。

期待してはダメだと思っても、期待してしまう。

これってさ、逆ハーフラグ立ってるんじゃない？  
可愛いの連呼だし。

なんか、やっと異世界召喚っぽくなってきた。

## 6 フラグ粉々にへし折られる

「――では、美咲様はいずれ魔王様とご成婚を？」

「んゝ。どうなんだろうね。一応婚約者って事になってるけど」

「美咲様のような方が婚約者なんて、魔王様は御羨ましい方ですね」  
「えゝ。そうでもないと思うけど」

とかなんとか一応謙遜して否定言っておいたが、気分は最高潮。  
あまりに人に褒められすぎると、自分がそのような人間なんだって  
思えてくる。

やばいな、これ。天狗になりそう。  
っていうか、もうなってる。

逆ハ一の主人公は戸惑ったり相手の気持ちに気づかなかったりで、  
天狗にならなけど私はすっかり舞い上がっている。  
もしかして、これって私が非モテだからか……？  
いや、違う！！断じて違う。

きっと適応力が高いからだ！！きっとそうだ！！

あゝ。もうなんかもうすっかり気分的には絶世の美女。  
こりやあ、紅茶も一段とおいしく感じる。  
紅茶を啜る私の頭にはすっかり花が咲いているだろう。

「ところで美咲様」

「何？」

「宜しかったら、美咲様のお姿を拝見させて頂きたいのですが？」

「は？姿？」

何言っちゃってんの？王子ったら。

姿も何も私は平安時代の姫君のように御簾に姿を隠しているわけ  
もない。

だから姿を拝見って言ってもさ。

一瞬この人達には私が見えないのか？って思ったけど、容姿褒められたし。

「美咲様は、あの魔王様のご婚約者様。ということは、女神のように美しいお人。」

この世界は魔界と違い、容姿の整っているものばかりではありません。

今のお姿は、我が世界に合わせて頂いていると思うのですが、

僕達はそのような地味な仮の姿ではなく、美咲様の本来の姿を拝見したいのです」

……ちよつと待て。

もしかしてこいつらは私がこの世界で浮かないように魔法が何かで今の姿をしていると思ってるのか？

んで、本来は魔王の婚約者って言っぐらいだから超絶美少女のはずだ？

——んなわけあるかいっ！！私はずっとこの顔だっつの！！

大体魔法も使わずにどうやって姿形変えるのよ！？特殊メイクでもしなきゃ無理だろ！？

ん？ということは、今までの逆ハ―展開だと思っていたのもただのリップサービスじゃね？

つまりは社交辞令って事がよっ！！

「またこのパターン！？」

いきなり立ち上がり叫んだ私を、王子達が目を丸くして見ている。

魔界で慣れたと思ったのに、またこれかよ。

私にはやっぱり逆ハ―展開はないのか。

「え。美咲様はまさか本当にそのようなお顔なんですか!？」

王子達が全員あげた声は見事に重なった。

すげえな、こんなに大人数なのにハモるなんて。滅多にないよ。

私はそのことに關心すら覚えてしまう。

「そうだけど何か？」

「あの失礼ですが、本当にあの魔王様のご婚約者なんですよ？」

「悪かったな、その辺にいそうな地味顔で」

「ほ、本当に申し訳ございません。歴代の妃様達はとても美しい方ばかりだったと伺っていたので……」

「すみませんねえ、歴代妃と違いイレギュラーな者で」

言葉の一つ一つを強調してやった。

それはもう、わざとらしく。

「そんなっ!!美咲様はとても愛嬌のあるお顔をなさっていますよ  
!!!」

「それ、褒めてねえし」

腕を組み威圧的な声で王子達に問いかけると、彼らの視線が面白いように泳いだ。

ほら、どうした〜?さっきの褒め殺しはどこに行った?

「に、人間外見より中身が大事だと思います!!」

そうきたか。

だが、それには同意する。

魔王だって見た目パーフェクトだけど、デリカシーのかけらもないし。

それに前の女神みたいに、見た目よくても悪女って事もあるもんね。

「まあ、たしかに。だって可愛くても悪女だとかなりマイナスだもんね。

でもさ、美女に甘えられてちよつと我儘言われたら嬉しいんじゃないの？

ほら、小悪魔系の子とかいるじゃん」

そつ何気なく言ってみたら、想像外な王子達の反応が返ってきた。

「嬉しいわけ無いじゃないですか！あんなの女神の皮を被った悪魔ですよー！」

「たしかにあれば無い。大体、ちよつとの我儘が金掛かりすぎ」

「けどさ、駄目だって頭ではわかってるけど、あんなに綺麗すぎる  
と聞いちゃうよな」

「そうなんだよ。潤んだ瞳で、お願いって抱きつかれると……あれ、  
反則」

「何、お前もやられたの？」

「お前も！？」

王子達は各自話がはずんでいるらしく、声がだんだん大きくなった  
り、

机から身を乗り出している奴まで出てきている。

…… 一体、どこでスイッチ入ったの？こいつら。

「ねえ。私、ちよつと部屋戻っていい？」

立ち上がり、そつ彼らに告げる。

だつてこのままずつと王子達の話が続きそつなんだもん。

それに逆ハーフラグでテンションあがつた分疲れが大きくて、少し  
部屋で休みたいし。

「お待ちください、美咲様」

「何？」

振り返ると、王子達が一斉に口を一文字に結んで私を見ていた。  
ちよつと、なんなの？この空気。

さっきまでの彼らのノリは何処にいったのかっでぐらい、はりつめている。

「部屋に戻る前に重大なお願いがございます——」

## 7 さくつと本題に入ります

宇宙人って見たことある？

いや、本物じゃなくて私が言っているのは、宇宙人の写真のこと。ほらモノクロ写真のやつ。

見た事ないかな？オカルト番組とかでたまに映像が流れると思うんだけど。

コートを着た男二人組の間に捕えられた某宇宙人が、両手をその男達に持ちあげられている構図のやつ。

今の私の現状は、なんとなくそれを思い出してしまう。

「あのさ、さっきまで客人扱いだったよね？それに自分で言うのもなんですけど、あんた達に比べるとかなりひ弱なんだっつうの。どうせだったら、夢のあるお姫様だっこで運ぶとかしてくれない？あんな達筋肉ありまくりだから、私なんて軽々でしょ？」

だってこれじゃあまるで、オカルト番組で良く見る某宇宙人みたいだ。

私はガシッと左右の両手をマッスル騎士二人に拘束され、引きずられるように長い廊下を無理やり歩かされていた。

その場に留まるように両足に力を入れているが、無駄な抵抗で終わっている。

私がそんな風にしながら過ぎていく城の廊下には、絵画が壁に飾られたり廊下の脇にはやたら高そうな壺が飾られていた。

こういうところは、どうせならドレス姿で優雅に歩きたい。

今、Tシャツにデニムというかなりラフな格好なんですけど。

……まあ、魔界こんなの城でも普段着だけださ。

「すみません。お姫様だつこはちょっと。俺、彼女いるんで」

「すみません。俺は好きな子にしかしたくないので」

お前ら、仕事って割り切れよ。

なんでもそうだけど、仕事っていうのはやりたい事だけじゃないだろうが。

「っていうか、あんたら以外と足早いんだね。そんな甲冑着ても走れるなんてさ」

「はい。一応騎士なのでそれなりに体力はありますから。しかし、美咲様は足がお速いんですね。全体的に平凡オーラ漂わせているのに」

「平凡オーラとはなんだ。平凡オーラとは。こう見えても、元陸上部なのよ」

あくまで元。……なので、こうしてあっさり捕まった。

まあ、中学の頃からじゃかなり現役退いているからしょうがないけど。

それに最近全然走ってないし。

「ねえ。逃がしてくれない？」

「無理です」

「なんでよ。大体さ、金も権力も兵もある王子達がわざわざ私に頼みごとをするなんて、絶対に面倒で厄介な物に決まっているじゃん。それに話だけでも聞いてみようものなら、絶対に引き受けなきゃいけない状況に持っていけるに決まっているし。私、異世界召喚に良くあるオプシヨンの持つてないから、ラスボス級の敵を倒せとかそういう厄介ごとはごめんだよ？」

逆ハ―中で浮かれている頭なら引き受けたけど、今は思考はつきり正常化している。だから私はあの部屋から逃げ出した。頼みごとの内容も聞かないで。

そしたらこの騎士達に掴まってしまったのだ。

そんでただ今、元の部屋に連行中。

「大丈夫です！！美咲様なら！！」

「そうですよ。あの魔王様のご婚約者様なんですから！！」

「ちよつと。その自信どつから出てくんの？さつきも言っただけど、異世界召喚したらいきなり今まで使えなかった高度な魔法を習得していて自分最強！！とかそんなテンプレ私には存在してないから。一応言っておくけど、魔界ではカリスマ性を持った絶対的な女神とかでもないよ。女神は女神でも補欠だし」

「補欠でも女神様は女神様ですよ。美咲様になら、きっと出来ますって！！」

「そうですよ。エンベラに行き、あの女を元の人間界に追い返すことぐらい簡単ですって」

騎士のその言葉に思わず顔が硬直した。

……おい。

今、なんかさくつと本題言わなかったか？

## 8 それが君のいいところ

「美咲様って、結構神経図太い方ですよ」

せつかくだからと窓を開け移り変わっていく異世界の街中の景色を見てたら、嫌みったらしい声をかけられた。

窓から視線をそこに移すと、茶色い短髪に太い眉の精悍な顔立ちの青年が、私の席と対面する席に座っている。

身につけているものからわかるように、彼は騎士だ。

年は私より上の25歳。名前はキースというらしい。

「……こんな事ポンツと投げられれば、誰だって神経図太くもなるっつもの」

はつきり言って私の声は低く冷めた感じで、相手に対する印象は最悪だって思う。

けど、それもしようがない。

だってさ、異世界召喚されてまだ数時間しかたってないのに、「元女神を自分の世界に還して下さい」って、あの王子どもに追い出されたのよ!?

着の身着のままこの世界に来たから、何も持ってないのに!!

あいつら、ほんと人任せすぎるわ。

しかも渋る私を無理やり準備していた馬車に押し込めやがって。

幸い着替え等は準備されていたし、一人じゃなく逃走用の見張り兼護衛の騎士も5人もいる。

なんでもエンベラにいるその元女神様があまりにも可愛いらしく、

王子達は言う事をなんでも聞いてしまうそう。

そのため、自分のところの妃達からは冷たい目で見られるし、溺愛中のエンベラの王子にも目をつけられるし、自分達の懐事情も寒く

なるで大変らしい。

はつきり言って、知るかつうの。

だって、考えてもみてよ。誘惑にのらなきゃいいだけの話でしょ？

しかも今回は、エンベラの家臣達も絡んでいるらしく、結構大ごとになりそうなんだよね。

その元女神様は金使いまくり、我儘言いまくりの為、エンベラ城の空気は過去最悪。

王子は王子で何も咎めないし、むしろ『可憐の好きにさせる。さもくなくばクビだ』とお前頭大丈夫か？的な発言をしているそう。はつきり言ってそんな奴迷惑だ。

その王子とやらのせいで、私まで火の子被っちゃったし。

「そうじゃなくて、王子達から金をむしり取って来たことです。なんて恐れ多い事を」

「お前、言い方変えろよ……むしり取っていくなんてさ」

「しかも、もつと寄せさせて言って最初の金額の倍以上請求するし。あのお金、庶民が三ヶ月は過ごせる額ですよ」

「こっちの物価分からなかったから多ければいいかと思って思ったのよ。それに悪いけど、必要最低限のものは貰うわ。だって私、無一文だし」

馬車に詰め込まれた時、私は王子達にお金の要求をした。

無一文でこの国に召喚されたため、私は手持ちのお金がゼロ。

食事をするのも、宿に泊まるのも全てにお金がかかる。

騎士達が別口で旅費を預かっているとは言え、こいつらに逃げられたら私は路頭に迷ってしまう。

それにどうせこいつらの事だから、エンベラにいったら、即座にあつちで手引きしているやつに引き渡して帰りそうだしさ。

何が起こるかわからないから、もしもの時のためを考えて多めに貰って置いた。

もちろん、魔王達が迎えに来てくれたら借りて使った分は後で返すよ？

魔界とこっちの世界って、共通の貨幣だから使う分には問題はない。もちろん、物価と貨幣価値は違うけど。

「そりゃあ、そうですね。すみませんでした。なんてがめつくて厚かましい奴なんて思ってた」

「おい」

「しかし美咲様は適応力があるというか、肝が据わっているというかなんというか」

「あゝ。最初の魔界への召喚もそうだし、実家のことも結構あったかも。でも、人間誰しも人生波乱万丈じゃない？だから、この件はしょうがないって開き直すことにしたのよ」

「すごいですね、そう前向きにとらえられるなんて」

「前向きじゃないって」

私も全部を受け切れない。

なんで私だけがこんな目に遭わなきゃいけないのって思う時もあるし、今みたいにめんどくさいって思う時もある。

もちろん、目を背けて逃げたくなる時も。

だからすごくないし、前向きな人間じゃないんだけど……

「でも、少なくとも俺より前向きですよ。今わかった気がします。そついう芯の通った美咲様だからこそ、顔じゃなく中見で魔王様に選ばれたんだなって。だって俺ならこんなめんどうなこと、邪魔する奴を叩き切って金だけ持って即座に逃走しますから」

「……お前」

そついう本心は大人なら黙ってる。

今からそれをやらなきゃいけない人間の前で言うな。  
引き攣る私とは裏腹に、白い歯を見せながら笑うキースの笑顔がや  
けに黒く感じた。

## 9 ピンチ！？

はつきり言って私にはまったく非がない。

それはもう断言できることだ。

だって、勝手に私のハードルをあげていたのはこの人達なんだから。しかもこの人達全想像力を使用してしまったせいか、ハードルを山のようにあげやがった！！

——だから別に私は悪くない。

「一体どういう事だ！！まさか、こんなのがあの魔王様の婚約者だというのか！？」

「我らを馬鹿にしているのか！？こんなその辺に居そうな娘を連れてきて！！」

私の目の前ではおじさんたちが一方的にまくし立てるようにして、

キース達にブチギレしている。

キース達が何度もなだめようとしているんだけど、おじさん達は全く効く耳を持たないらしい。

つか、ヒートアップしすぎじゃね？

身振り手振りして抗議していたけど、今度は体全体で抗議し始め、キース達を扉の前から、壁際まで追い込んだんじゃってる。

キース達もおじさん達が身分が高いからあまり強く出れないらしい。

でもさ、いくらお偉いさんだからって、この扱いはないよ？

お茶すら出されてないし。

そもそもここ空き部屋でしょ？明らかに。

私たちがエンベラ国につき、案内されたのはこのちゃっちい部屋。  
8畳ぐらいかな？室内には椅子が2脚だけポツンとおかれているだ  
け。

最初は謁見の間に案内されたんだよ？

それなのに、王子より早くこの小太りおじさんとやたらダンディな  
声のおじさん達により、引きずるようにして私たちはここに連れて  
こられたのだ。

まったく、なんなんだよ。

歓迎されないなら、とつとと帰りたいんだけど。

人のことけなすような奴らの所にいたくないっつうの。

魔界の人間と違い、こいつらはわかって言っているからムカつくし。

……まあ理解できなくても、毎度魔界連中の神経のなさには腹立つ  
けどさ。

「こんなのって言うのは、少しお言葉が過ぎませんか？美咲様は魔  
王様の婚約者様であられるんですよ？」

「そうですよ！！美咲様とはまだお話されてませんよね。そんなの  
じゃ、美咲様の良さがまだわかりになれませんか？美咲様は、  
いずれは魔王様の伴侶となれる尊きお方。そりゃあ、正直俺だっ  
て最初はこのなのって思いましたけど」

おいっ！！後半いらないよね？必要ないよね？

私のことを庇ってくれているキース達だが、時々本音が混ざるのが  
たまに傷。

ここに送り届けたら帰国すると思った彼らだが、意外や意外私の傍  
にちゃんと付き添ってくれている。

この旅を遂げて友情が芽生えた！？って一瞬思ったけど、んな感動的な展開じゃない。

もちろん、彼らの弱者を守る騎士道から来るものでもないよ。

こいつらの目的はただ一つ――シリウスだ。

女神補欠の私の事を、魔界から魔王達が助けにくるかもしれない。その魔族の中にシリウスもいるはず！！って思考回路になったそう  
だ。

シリウスの姿を目に焼き付けられるから、私の傍につきここに残ることにするんだって。

さすが完璧ボディの妖艶姉さんとも言うべきか、人間界の騎士達まで魅了していたようだ。

「本当に期待はずれも良い所だ。こんな小娘だとは」

「魔王様の婚約者というから、可憐様のような人外の美しさの者と思っておったのに。どうするんだ？我々の予定が崩れるぞ」

「たたく、私はただの大学生なんですってば。」

毎回パターン化している私の評価に対し、私はため息を吐き、口を開く。

「そんなに不満なら帰りますけど？」

「帰るとは何事だ！！お前は何しに来たんだ！！」

小太りのおじさんが睨むけど、どうでもいい。

だって何しにきたもないし。

「ねえ、キース達。帰ろう」

ここにいる必要なんて全くない。

あゝ、どうすっかな。めんどくさい。

そんなことをぼんやりと考えながら、扉に手をかけた瞬間、その板

が勝手に開いた。

——は？

顔を上げるとそこには、イケメンと数人の兵が立っていた。

イケメンは短めの金色の髪に鷲のように鋭い瞳、堀の深い輪郭の整った顔立ちをしている。

背も高く、180センチは超えていると思う。

ガタイもかなり良い。

私の世界で見かけたら、建築関係のお仕事ですか？っていうぐらい引き締まった筋肉質だ。

「王子！！」

王子？ああ、たしかに。

おじさん達のうわずった声に、私は納得した。

やっぱ庶民とは、衣服にかける金のかかり方とオーラが違う。

「お前達、ザールとワイを捕えろ」

王子は顎を使っておじさんたちを指すと兵に命令を出す。

「王子。お待ちください。我等は……——」

「お前らがやるうとしていた事は全て把握している。言っただ。俺の可憐を傷つける者は許さないと。しかも、俺から可憐を引き離すなんて愚かなことを」

俺の可憐と言っているところから、どうやらこのイケメンが噂の王子らしい。

私としてはもう少し後で会いたかったんだけど。

だって、まだこっちの国の状況も把握してないし。

それなのにこの女神命の王子とあっちゃったら、あきらかに面倒なことになるのはわかってるじゃん。

なんせ、私たちは女神様を元の世界に連れていくことが目的だもの。もちろん、ちゃんと可憐さんの話は聞くつもりだった。

「王子。この者達は？」

「あいつらと同じように牢へ入れとけ」

「はあ！？」

さしあたって彼は私たちに興味ないらしく、そう言い残すと室内から退出しようと体を反転させた。

「ちょい待て！！なんで私らが牢になんて入らなきゃなんないのよ！！……っ！！」

右腕に痛みを感じるぐらいにがしつと掴まれ、思わず苦痛を訴える声が漏れる。

この馬鹿力が！！こっちは一応ただの人間の女だっつもの！！

## 10 どの魔王様ですか？

「ちょっと、出しなさいよ！！聞こえているんでしょ！？看守ーっ！！」

私はガシャンガシャンと格子を揺すりながら、自分が今出せる最大の声量でどなり散らしていた。

普段こんな声出したら近所迷惑のレベルだけど、今はしょうがない。危機的状况に陥っている最中だから。

——あいつら、絶対に聞こえてるくせに！！

こんな大声を出しているのだから、たかが5mぐらい離れている彼の耳には届いているはず。

だが、そんな私のことを彼は一瞥する様子がなかった。

看守は私達のいる牢から、斜め方向にある地上と地下を繋げている階段付近にいる。

左右に分かれ、唯一の入り口を警護しているのだ。

二人とも同じ灰色の衣服に身を包み、数十個はあろうである鍵の束を腰にぶら下げ、槍を右手に持ち、直立不動の体勢を取っていた。

「お前ら、聞こえてるんだろ！？無視すんなっつもの！！」

それでもなお無視をし続ける看守に、私はイラつきが押さえられず格子を蹴った。

スニーカーを伝って、じわりと痺れが足に伝達する。

そんな鈍い感覚を味合わなければならぬほど、私は自分の感情を抑える事が出来ない。

こういう時こそ冷静さが必要だというのに、私はただ感情をぶつけているだけ。

わかつてはいるけどさ……

どうしても感情で動いてしまう。

これも全てあの馬鹿王子のせい。

私達はあれからあの馬鹿王子の命令通り、この地下牢に閉じ込められてしまったのだ。

しかも、私と騎士分けずまとめて放り込むし。

普通男女わかるだろが。

この地下牢、一旦収容するだけの施設。

罪の重さにより処遇が決められ、そして郊外にある監獄に移送という形をとられるそうだ。

だから逃走を図るなら、今のうちに図らねばならない。

冗談じゃないっの。

何も悪いことしてないのに、こんな目に遭わされるなんてさ。

「美咲様」

「何？」

「あの者達はここを開けることは絶対にしません。少し落ち着いてお休みになられてください」

キースに肩を叩かれ諭されるが、それでもなお私は格子を揺らしながら声を張り上げた。

私だって理解してるよ？

こんな事していても無駄だって事ぐらい。

でも何かしてないと気がまぎれない。

じっとしてて考えるのは、ネガティブな事ばかり。

もし、罰せられたら？

もし、処刑されたら？

そんなマイナスなことがぐるぐる頭の中を回っていく。

はあ……どうしよう。

異世界召喚してから何十回目となるかわからないため息を私はまた吐き出した。

ため息なんて吐きたくもないのに、出るっつもの。

何か作戦を考えねばって思うんだけど、浮かんでくるのはありきたりなテンプレばかり。

その一、「トイレ行く」って言ってここから出して貰い看守をボコボコにして脱獄。

その二、色仕掛けで看守を誘惑。

その三からは以下省略で、どれも私にとっては非現実のものなんだよね。

「美咲様。魔界の方はいつごろこちらに来て下さるかわかりますか？」

「たぶん、魔王の熱が下がって風邪が治ったら来てくれると思う」

「は？風邪？」

「……何？もしかして知らなかったの？」

「はい」

他の騎士も見ながら、「あんたたちも？」って聞いたら頷かれた。

「元々私がこつちの世界に来たのは、空間の歪みのせいなの」

「それは伺ってます。茨の扉から来たと」

「そう。知っていると思うけど、あの扉の空間を管理してんのは、魔王。それが風邪ひいちゃって高熱出して寝込んだせいで、魔力が不安定になり、空間に影響しちゃったのよ。そこへ私が護衛もつけずに一人でやって来て、扉からこつちの世界に引っ張られちゃって

人間界に来ちゃったわけ」

それは私の過失だ。

一人のこのこやってきてしまったから。

「では、今すぐに魔王様達が助けに来て下さるのは無理ですね」

「だろうね」

映画や漫画では、いつもこういうピンチになったら、ヒーローが助けに来てくれる。

だけど、それはしよせん物語の中だけ。

現実、そんな都合よくいかず自分でなんとかしなくっちゃいけない。

「意外ですね」

「そう？誰だつて風邪ぐらいひくでしょ」

私みたいに体質で引きにくい人はいるかもしれないけど、引かないわけじゃない。

「いえ。そういうことではなく、あの魔王様が弱っている姿を人に見せるなんて想像できないんです。やはり美咲様だからでしょうかね。魔王様、いつも威厳にあふれ、威圧的な方ですから。あのお美しさのせいもあるかもしれませんが」

「あゝ、わかるわかる。近づきたくないんだよな。なんっつか、空気が張り詰めていて」

「俺も騎士団で王子の護衛した時に、一回だけ見たけどすごいよな。神々しいオーラがあつて怖い」

口々に言う彼らに対し、私は面食らった。  
威厳あふれる？威圧的？

魔王からは想像もできない言葉だ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3549o/>

---

その者を追い返せ

2011年9月23日17時13分発行